

18歳の春を泣かさないために

ない。アスリートがコーチの優れた指導を受けて、常人にはできない身体能力を見せるように、高校生が運転の心構えを教わり、安全な操作方法を学ぶ機会さえあれば、死に至るミスを犯すことはない。

3ない運動は、かけがえのない若い命を交通事故で失わるために続けられているのだろうか。そんな疑問を感じたことがほかにもある。

前回の掲載で、埼玉県教育委員会が示した高校生の二輪車事故の統計について話を聞いたときのことだ。

3ない運動によって事故死が減っていくことを数字で示したものだが、それでも起きている死亡事故について、県教委はこう説明したのだった。

ない理由がある場合は、バイク免許の取得を許可し、通学ができる場合があります。しかし、ここに出てる数字は、そういう許可生徒ではありません」

運動が展開された30余年間、3ない運動は、そのルールに従う高校生だけを守ってきた。学校の指導をきかない代償は大きい。けれども、3ない運動によつて守られた高校生は、亡くなつた生徒と同じように、交通社会の危険回避を学ぶ機会を、ほとんど与えられないまま卒業していく。

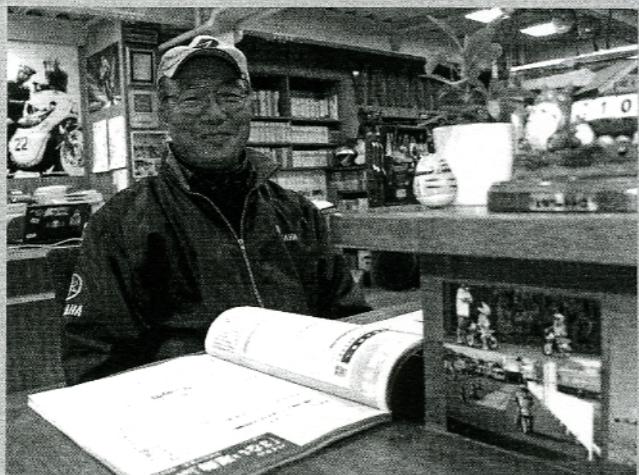
交通事故に行くとか、君がな自身でやつてみてくれ。そうすると、時にはまったく相手にされずに一蹴されることもあるが、それが交通安全に対するこの社会の姿勢なのだという勉強になる。そこから考えることが交通安全の第一歩なのだ。

高山氏の体験談は、気をつければ交通事故は起きない、事故の危険はそこから離れることで回避できるという受身の安全を許さない。それでも起きる事故に対して、安全のためには何が大事なのかと、いうことを積極的に考えて、克服することを求めている。

冒頭に登場したバイクショッピングの伊藤氏は、創業当時からワーカクスレーサーとして培ったノウハウを生かした安全教育に携わっている。埼玉県警に協力して安全指導を10年間続けたこともある。自動車教習所を借り切った「レベルアップ走行会」で親子で楽しむ安全教室は今も続いている。3ない運動とは真逆の運動だが、同じ時間が経過した。

「売りたいために教えるわけじゃない。いずれ交通社会に出るのだから、少しでも若いうちに、訓練を積むべきだと思うのです。教育委員会と助け合っていきたいと思う。今ならいけると思う」

そんな思いを込めて、伊藤氏は今年も埼玉県教育委員会に新年の挨拶に出向い



- サイクルロードティーを経営する伊藤昌氏(70)。東日本大震災でも、石巻・雄勝町の救援の行き届かない場所をバイクでつなぐボランティア活動を行なった。「そんなバイクのよさも評価してほしい」と語る



●これが
は「危険
くす積極
れる」と
高山俊吉

30余年続いた3ない運動の中で、親子3代にわたってバイクショップを営んできた家族がいる。

1979年に埼玉県さいたま市で『サイクルロード・イト』を創業した伊藤昌氏（70歳）とその家族だ。伊藤氏は国際A級ライダー。日本GPにも出場経験がある。まもなく始まるソチ・オリンピックを前にこう話した。

「スキージャンプ競技で活躍するのは17歳の高校生ですね。その高校生たちを見て、ケガをしたらどうするんだ、ジャンプは高校生活に本当に必要なのか、と言いい出したら、選手はどう答えたらいんでしょう。まして、みんなスキーやスノボをやつたりしているのに、高校生に必要はないと言い始めたら……。おかしなことになると思うんです」

オリンピックに挑む高校生が滑走するのは、安全な着地ができる飛距離（ビルサイズ）が120mにも及ぶラージヒルだ。初心者が同じジャンプ台に挑むことは、安全な着地ができる飛距離（ビルサイズ）が120mにも及ぶラージヒルだ。オーストリア選手でも、バランスを崩して重傷を負ったことが、この1月に報じられたばかりだ。

「して話しませんね」
伊藤氏に代わって、副社長を務める岡
田隆幸氏が答えた。

3ない運動を行なう側は、高校生活の
短い3年間だけ「バイクは不要」を唱え
ているつもりかもしれない。しかし、31
年も続く運動は、じつに親子3代にわた
って影響を及ぼし続けている。

* *

バイクの3ない運動は、何を守ろうと

してきたのだろうか。改めてそんな疑問を持ったのは、取材中にこんなエピソードを聞いたからだ。

埼玉県内に中学を卒業して社会に出た子供と、高校に進学した子供がいた。2人は友だちだった。一足先に社会に出た子供には3ない運動はない。バイクの免

て免許を取得して、バイクに乗ったこと。
もう1つは、運転操作を誤ったことだ。
運転操作ミスは、高校生でなくとも起き
る。だから、高校生がしない運動を守つ
ていれば、そこで事故に遭うこともなか
つた。

バイクの 「3ない運動」はいま

report ● 中島みなみ

短期集中連載 第02回

運動が犠牲にした一生の安全に役立つこと

最後の“3ない”宣言文

年 度	事故件数(件)	死者数(人)	死亡事故あたりの事故発生件数
1981	1188	12	99
2007	340	3	113
2008	233	2	116
2009	252	6	42
2010	246	4	61
2011	204	3	68

●埼玉県の高校生のバイク事故死者は、運動当初の約半分の事故件数で発生している計算になり、致死率の異常な高さを示している。適切な安全運転教育を高校生に届けることができれば、死者は減らせるはずなのだが――

バイクの3ない運動——免許を取らない、乗らない、買わない
3ない運動+1——3ない運動+親は子供の要求に負けない
4ない運動——3ない運動+乗せてもらわない

許を取つて乗り回すようになり、ほどなく高校生も免許を取つた。いつしょに遊ぶためだ。バイクでコンビニに寄つたある夜、高校生はガソリンが入っていないことに気づき、スタンドへと向かおうとした途端に遭う。アクセルの開け方を誤りバイクを急発進、電柱への激突死だった。

3ない運動を継続する埼玉県の場合、亡くなつた高校生には、2つの選択ミスがあつた

●埼玉県における3ない運動は、秩父地域の通学困難地通学など“特別な事情”に限り、使用が学長により許可されることになっている（07年8月の吉川宣言）